東洋経済日報　2014年7月4日　金曜日

韓日友好、異文化理解の促進を

朝鮮の美を守った日本人、浅川巧の生き方に学ぶ「清里銀河塾」

韓日の草の根交流が、活発に行われている。山梨では韓日中の学生・市民が参加する「第11回清里銀河塾」が、このほど開催された。小澤龍一・同塾長代行に文章を寄せてもらった。東京では今月18日から国際交流ミュージカル『パパの誕生日』が上演される。

第11回清里銀河塾の参加者たち

「清里銀河塾」は、在日2世の河正雄氏の私塾であり、今年で11回目を迎える。河正雄氏は浅川巧の生き方、ポール・ラッシュとの出会いの体験を次の世代に伝えることが日韓を繋ぐ種になることに望みを託してきた。

今回、講師を神林留学生奨学会理事長の神林章夫氏にお願いした。

神林氏は信州大学経済学部長時代、一芸入試を導入、偏差値で輪切りされる入試制度に風穴を開け、さらに大学の閉鎖的体質を打破すべく、外部講師を採用、香港出身のアグネスチャンを講師とし、話題を呼んだ。「学問は全ての人に開かれねばならない」が氏の信念である。

神林氏が、講演の冒頭、延辺朝鮮族自治州を取りあげた。

植民地時代、抗日拠点の地、満州族・朝鮮族にとって、自治州の西南に聳える長白山(白頭山)は聖なる山。聖なる山を北東から仰ぐ延辺朝鮮族自治州。この地の朝鮮族は、大国に挟まれ日々緊張を強いられている。延辺朝鮮族自治州・北朝鮮・韓国・在日に裂かれた朝鮮民族の苦悩。言葉を選んで語る。四分割に裂かれた朝鮮統一に触れず、孫文たちにより清朝が倒れた時代の歴史を学ぶ重要さを呼びかけ、さらに『1984』と題した本を紹介した。100年前に書かれた本である。新興するドイツの台頭に西欧列強の不安は募り、既得権保持のため列強は同盟を強化する。やがて、新興パワーに対するナショナリズムが暴走。西欧の火薬庫、バルカン半島で一発の銃声が鳴り、温もりに浸っていた民衆も第一次世界大戦に飲み込まれてゆく。

平和の裏側で台頭するナショナリズムの波、その波が戦争と社会主義革命そして管理社会を誘発することを予言する本である。新興パワーに対するナショナリズムの動き、今日が100年前と近似していることを示唆し、歴史から教訓を学ぶ大切さを若者に語った。

翌日は「浅川兄弟ゆかりの地を探訪」資料館で澤谷学芸員から浅川巧の生き方を学び、さらに、ポール・ラッシュ記念センターでポール・ラッシュについて学ぶ。

韓国から駆け付けた「浅川巧顕彰会」の方々8名に講師、塾長、一般参加者も加わり、2泊3日のまとめの討議は「国境を超えた友情を実現するには、何が大切か」がテーマであった。秀林外語専門学校の学生と共に班別討議が始まった。私が参加した班では日本人の曖昧さが指摘され、「日本人は何を考えているか分かりにくい。民族の壁を越えた交流・友情を実現するには、自分の考えを伝え、相手を理解することが大切」と韓国・中国の学生は語る。

それに対し、相手の事を考え、なかなか語れないと日本の学生。学生の語らいに耳を傾けていた顕彰会の朴さんが、「日本にいる間に、日本の文化をしっかり学ぶように」と諭すように留学生に語り掛けた。

日本人の曖昧さの裏には、相手を思う「間の文化」や調和を求める側面がある好意的な助言である。討議のまとめ発表でD班の代表は、東アジアの民は皆同じモンゴロイド、次代は国境・国籍に縛られる時代ではないと班のまとめを発表した。

3日目は日本最大の国立野辺山天文台を見学した。銀河輝く宇宙は誰のものでもないと塾長の河正雄氏は語る。

歴史認識を欠落させる数々の妄言やそれと連動するヘイトスピーチ（憎悪表現）により、人間の尊厳が削がれるような日々が続いていた。しかし、この2泊3日の塾で、日韓中の若者の清々しい感性に接し、彼等こそこれからの歴史の形成者として育っていくことを確信した。（小澤龍一・清里銀河塾長代行）